

IV 成果と課題

主体的に学ぶ子どもの育成を目指し、本校では以下のような仮説をもとに研究を進め、実践を深めた。

問題解決的な学習過程による授業づくりと言語活動を効果的に位置づけた単元づくりを行うことで、子どもが主体的に学びたいと感じる国語科学習指導を創造し、基礎的・基本的な知識や技能はもちろん、意欲や思考力・判断力・表現力を併せた「確かな力」を育成できるであろう。

その結果、問題解決的な学習過程による授業づくりや言語活動を効果的に位置づけた単元づくりにおいて、多くの手段や方法を確立することができた。我々にとって大きな成果のある研究だった。同時に、明確な学習過程や魅力的な言語活動は、子どもの学びへの主体性を確実に向上させた。しかし、各種学力調査の数値的な結果に研究の成果が結びついていない現状は課題であり、改善しなければならない。

ここでは、これまでの研究推進の成果と課題を明らかにすることで本年度の取り組みのまとめとする。

(1) 成果

○ 「国語が好き」な児童の増加

問題解決的な学習過程による「わかる」授業、やりがいのある言語活動を積み重ねることで、「国語が好き」という子どもが増えた。校内アンケートの結果は、県平均や全国平均を大きく上回る数値となっている。「好き」という素直な思いは主体的な学びへの第一歩であり、大きな成果だといえる。

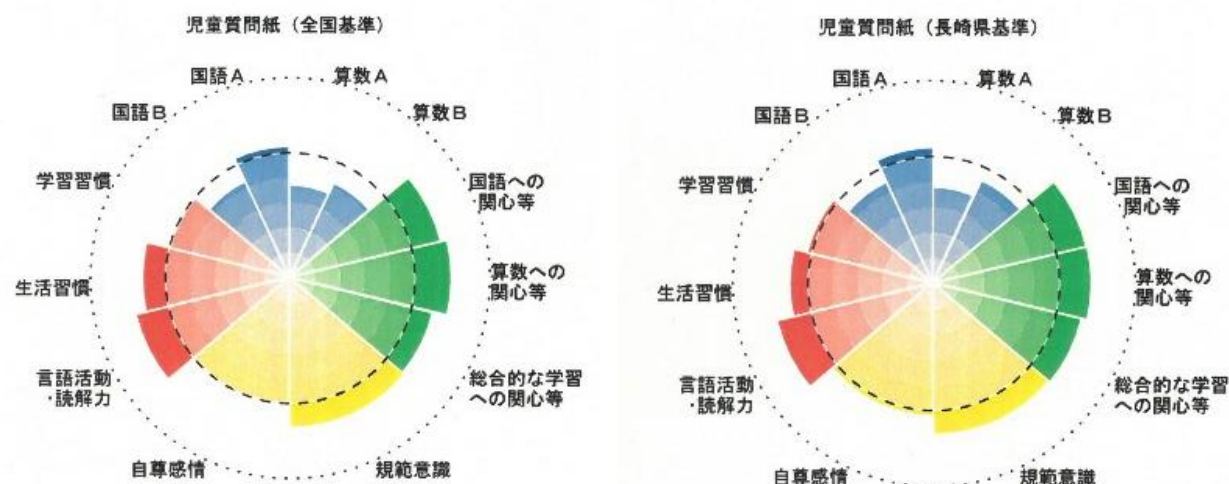
★「校内アンケート」（平成29年7月実施）より

「国語の学習は好きですか？」・・・◎75.9%（〈平成28年度〉全国：23.7%，長崎県：20.0%）

○ 言語活動を効果的に位置づけた単元づくり

本校の子どもたちは、授業の最後に位置付けられている「つなげる」の時間をとても楽しみにしている。それは、本時の学び（「ポイント」）を生かし、汎用化することで言語活動（本の紹介やクイズ作り、感想の交流など）をより良くする楽しさを感じているからだと考えられる。本年度の学力学習状況調査の結果チャートを見ても、その成果は明確になっている。多様な言語活動に慣れ親しむことで思考力・判断力・表現力が高まる。将来的にはB問題の数値的な結果の向上に結びつくことが期待できる。また、国語への関心が高いことも言語活動を効果的に位置づけた単元づくりの成果である。

【平成29年度全国学力学習状況調査】「結果チャート」



○ 見通しをもって授業に臨む子どもたち

問題解決的な学習過程に則った授業を積み重ねることで、子どもたちは課題解決の方法とその順序を身につけている。「先生、次は予想ですね。」「もう、まとめを書きました。」など、低学年においても教師の指示を待たずに、見通しをもち、進んで学習を進める姿が見られる。子どもたちの学びに対する主体性の高まりを感じる。全学年が同じ学習過程で授業づくりを行っている成果だといえる。

○ 「ねりあげる」過程の構造化

問題解決的な学習過程の定着に伴い、課題として見えてきたことが「ねりあげる」過程だった。「つかむ」、「しらべる」過程をスムーズに展開し、「ねりあげる」過程に十分時間を取ったとしても、子どもたち同士の話し合いがうまく進まない場合が多かった。そこで、「ねりあげる」過程のあり方を検討し、本研究として下記のように「勝本モデル」を定めることとした。その結果、全体として「ねりあげる過程」の型が定まり、その積み重ねによって成果を高めることができるようになってきた。

【「ねりあげる」過程（勝本モデル）】

「広げる」or「集める」（一人調べの意見収集）→中心発問→「深める」（子どもの思考を深める）

（2）課題

△ 数値的な結果の向上

上述したように、本研究の成果（主体性の向上）が各種の学力調査の結果に結びついていないことが大きな課題。本年度は国語Aの結果に改善が見られたが、国語Bは全国・県平均を下回っている状況である。子どもたちの学ぶ姿勢の改善に伴い、今後、数値的な学力の向上も期待できるが、さらに目に見える形で結果をより良いものにできるように指導のあり方を工夫していかなければならない。（平成29年度全国学力学習状況調査の結果）

国語A	国語B
△	▼

△ 多様な課題に対する問題解決のあり方

研究を進める中で、指導事項によって問題解決的な学習過程での展開が難しい授業があることが明らかになった。幅広い意見や考えを求めたり、異なる意見や感想の交流を目的としたりする場合などは、児童の意見を集約しづらい。しかし、「答えが1つ」ではない場合の授業展開においても問題解決的な学習過程を弾力的に運用しながら、子どもの主体性を高める授業づくりができるようにしたい。

△ 自分の考えを書く

「一人調べ」や「ねりあげる」過程において自分の考えを書く活動を位置付けている。しかし、各過程を展開する中で時間不足となることが多く、「書く」活動をどのように保証するかが課題となっている。まずは課題をできる限りシンプルにし、短い時間に簡潔に書く活動を継続させる。「書き慣れる」ことが今後の学力調査にも対応できる「書く能力」を向上させることにつながると考えられる。

△ 「ねりあげる」過程をより効果的にする手立て

さらに「ねりあげる」過程において、子どもたちが進んで話し合い、考えを深めていけるようにすることが本研究の課題である。問題解決の肝心な部分で教師が中心になってしまえば、主体的に学ぶ大切な機会を生かせないことになる。子ども同士で指名し合ったり、意見をつなげたりするなど「ねりあげる」方法（型）を身に付けさせることで、「ねりあげる」過程をより効果的にしていきたい。

子どもたちを真に主体的な学び手とするために、今後もさらに課題と向かい合い、研究を推進したい。